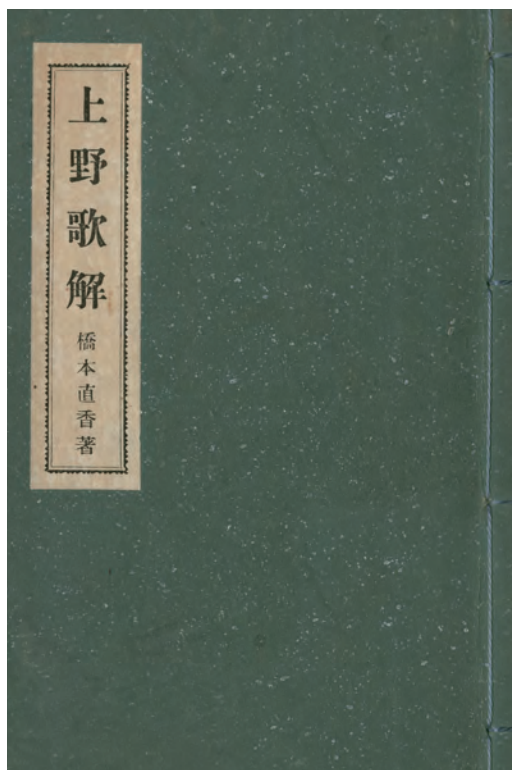


上野歌解

復刊版



群馬地域文化振興会



橋本直香肖像

あ

あ

あ

あ

あ

あ

あ

あ

橋本直香略傳

直香は橋本氏なり、文化四年（大正十二年ヲ去ル百十七年前）を以て、上野國山田郡境野村乙六百二番地に生る。幼名を龜松と云ひ、彦八と稱す。初め靱雄寛瀉といひ、後又直香と改む薰園は其號なり、屋號を島屋と稱し資力あり代々飛脚問屋を以て業とせり、先生の時に至りて側ら機業を營みしが不幸にして家道振はず百難交々至り進退維れきはまる。先生醜然として深く悟る所あり、遂に家産を捨て、郷里を辭して、遠く江戸に出奔すあはれ、歳四十餘にして、文學を以て身を立てんと志し、橋守部（嘉永二年五月廿四日歿六十九）の門に入り、國學並に和歌を學ぶ、蓋稀に觀るの篤學なり爲めに大いに師の愛撫する所となる。研鑽一日も倦ます宜なるかな、遂に出藍の譽ありと稱せらる、資性溫雅、恭儉にして頗る君子の風あり其筆蹟の如きも師守部を範とすと雖も亦自ら一派を成せり、著はず所姓氏錄補闕四十卷作者部類傳若干、國史雜傳抄、職原私抄十卷、旋頭歌解三卷、諏訪詣之記二卷、歴史年代略三卷、上野歌解二卷、萬葉集私抄二十卷、三十六歌仙部類抄二十八卷、題詠復葉集六卷、百人一首小倉梯二卷、等あり。初東京赤坂一ツ木町卅二番地辨天山に居をトし子

弟を誘掖せり、後又赤坂氷川神社祠畔に居を移し育英の業に従ふ、教を請ふ者、大名旗下より町人に至る迄、其數極めて多し、明治廿二年九月齡八十三歳を以て病んで歿す、本郷駒込蓬萊町大林寺に葬る墓碑表面に橋本直香之墓裏面に男安三郎建之右側面に指月院直心淨光居士、行年八十三歳と刻す惟ふに、先生畢生の事業は萬葉集の研究に在り、而して師守部の後勁者として、毅然として立ち努めて形而上に及び以て萬葉の眞髓を闡明し、奈良朝前後に於ける我が國民文化の實相を發揮せんとするに在りき、然るに一門弟子の手に依りて、僅に萬葉集私抄二卷を出版せしのみにして浩漭なる稿本は、先生の歿後、忽ちにして湮滅するに至りしは、我國學界の爲め深く遺憾として措く能はざる所なり。嗚呼先生逝いて三十五年茲にその冥福を祈らんが爲めに敢て小傳を物する所以なり

(長島織吉氏著「橋本直香小傳」より)

上
野
歌
解

上

萬葉集なるこの上毛歌なも伊香保呂のそひのはり原ねも
ころに見もてゆけさねわきかたくたこのねによせ綱引は
へてよすれごも思よるへきたごきもあらぬごこの葉そお
ほかりけるさるをわか友橋本ぬしはかのくによしあり
て教子たち澤に有ければ可保夜かぬまのいはるつら引の
まに／＼いゆきしをりごごに名所をふかくまさくりて書
綴られたるこの釋言よいご委曲なりやごごに新田山にひ

ノヽしく佐野の船はしかけはなれたる考ごも多かりけり
刀根川の河瀬もしらす惑る人よみごきなむたよりにもけ
たしなりなむかしごておのれもかつノヽおもひねたる
ふしノヽは書そふるついでに一言しるす

安政六年四月

平戸家人 橘 冬 照